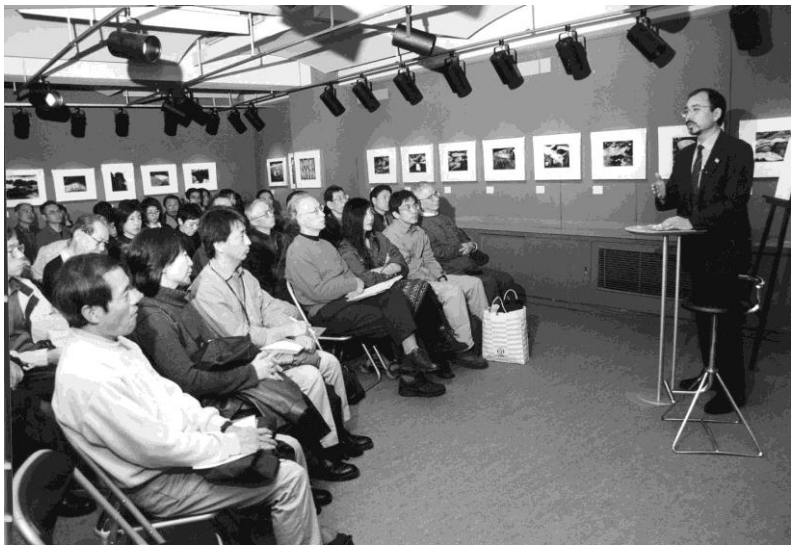
Photographic Society of
Zone System

ゾーン・システム研究会会報
発行日：2002.7
発行者：中島 秀雄
編集部：内田順
編集レイアウト：荒井 崇

NO.22

CONTENTS

・展覧会を終えて
（東京工芸大学写大ギャラリー）
・中島秀雄写真展[光への観照]全作品
（東京工芸大学写大ギャラリー）
・細江英公先生講演会レポート
「プリントコレクションの愉しみ」
・日光撮影会
・Information



展覧会を終えて

（東京工芸大学写大ギャラリー）

中島秀雄

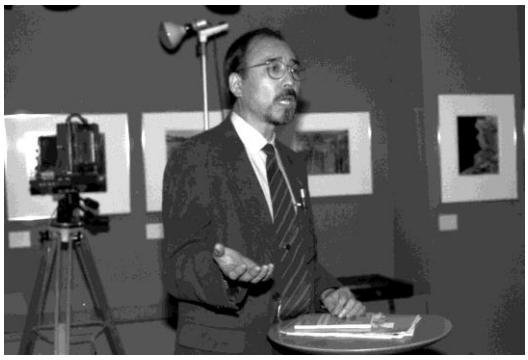
写大ギャラリーは、私がまだ助手の頃に立ち上がり、最初の展覧会はアメリカの写真家ウィン・バロックだった。彼の作品の中で最も有名な“ﾁｬｲﾙﾄﾞ・ｲﾝ・ﾌｫﾚｽﾄ”を８ｘ１０で複写し、コンタクトプリントを作って出席者に配布したことは今でも記憶に残っている。その後、内外の重要な作品展の場として発展し、ワークショップやギャラリートークを交えてプロの写真家をはじめ、一般の多くの写真愛好家を魅了し、写真が現在でも文化の重要な位置にあることを表明してきた。写真の内側の意味や写真家自身を知る場として、そして、私の写真のスタイルを形成する出発点にもなった写大ギャラリーに、私が自分の写真を抱えて戻ることなど考えてもいなかった。

今回の作品は、過去に行った個展や研究会での展覧会の作品の中からおよそ 70 点の作品を工芸大学に持ち込んだ。藤田昭子の原風景、ナチュラル・ランドスケープ、リバー、ストレンジ・オブ・ライト、ボタニカ、リバー・ヌード、ボーデイ・その他。そして、作風の違いや全体の流れのことを考え、53 点に絞った。何点かは私の希望で追加

したものもあるが、多くの作品のセレクションは大学にお願いした。以前からプリントとして保存していたもの、焼き直したもの、新たに追加したものもある。古い作品にはプリントレシピはなく、再プリントのためには改めてイメージを掘り起こす作業から入ることになり、数枚プリントするのにずいぶん時間がかかってしまった。現在、我々が進めているプリントレシピはほんとうにありがたい。

藤田昭子の原風景は、ほとんど合成写真で成り立っている。今回の二つの作品とも平塚の海岸で撮影したもので、空に浮かぶ雲は別のネガから流用した。平塚の海岸で撮影したときはいつも曇りの日かピーカンで、ドラマチックな雲など一度もなかった。雲の写真は伊豆へ遊びに行ったときに撮ったもの。原風景の取り組みは“写真とは創っていくもの”という私の作品作りの基礎になっている。藤田氏の創作した造形物を、本来存在すべき理想空間を創造していくことで作品の意味を広げ、視覚的な面白さを表現することが、私に課せられた仕事であった。まとめて展覧会やったらどうだと細江さんに言われ、スタジオでの仕事が終わった後、終電まで暗室に入って仕事を続けた。筑摩書房から写真集にもなっている。

ナチュラル・ランドスケープは、ゾーンシステムの学習の成果をためす仕事でもあった。
これまでの撮影方法からゾーンシステムへの切



り替えのための訓練でもあり、実践でもあって、４ｘ５を担ぎ自分のイメージに合いそうな場所ならどこにでも行った。当時はまだ車がなく、どこへ行くにも電車とバスを使って移動し、いつもくたくたになって帰ってきた。作品を作るというより最初はカメラや新しいテクニックであるゾーンシステムに慣れることが優先で、それで満足していたが、続けているうちに自分のイメージと重なるようになり、作品につながって行った。最初は自然の表面的な美しさに感動していたが、それだけでは満たせないものを強く感じるようになり、より強く自然が語りかける本質的な美しさに気がつくようになっていった。

これらの作品をまとめた頃、自分のやっているゾーンシステムは正しいやりかたなのか確認したくなり、アメリカのワークショップに参加した。すでにゾーンⅥのフレツド・ピッカーとは機材の購入などを含めた情報から、その内容は分かっていて、そこに参加するのが一番いいと思っていた。このときＰＧＩの山崎氏とニューヨークで会い、展覧会を決定した。

一枚一枚の写真を見ていくと、そのときの光のことや周りの情景がはっきり見えてくる。そして、その時どんなカメラを使ったかも思い出すことが出来る。以前のイメージを引きずっている写真もあれば、越えようとしていまだに越えられない写真もある。しかし、それ以上にそのときの自分自身の技量や精神状態が浮かんできて、写真を見ながら実は自分の心の遍歴を見ているようでもあった。

助手の頃、私は、35m/m カメラでコンポラに近い写真を撮っていた。しかし、アダムスやウエストンを中心としたアメリカの写真を見るようになってからは大型カメラへの思いが次第に強くなり、抑えきれなくなってきていた。そして、ゾーンシステムを知るようになってからは 35m/m カメラに戻りたいと思ったことは一度も無い。

夢中で進めてきたが、ここまで来るには途中様々な問題が立ちはだかり、そこから退いたり逃げたりもしてきている。一人の人間が何らかの普遍的な価値を貫き通すには、世の中のレールから多少シフトした位置にいなければ続けられないと思っている。自由でいたい、一人になりたい、開放されたい。そんな気持ちが強くあって、カメラを担いで外に出ることですべて手に入れられると思っていた。しかし、生活のためにビジネスに引き戻されれば、自分自身を抑える必要があり、責任を貫くためには仕事を絶対優先しなければならない。それがストレスとなって高まると、私は必ず体のどこかに変調をきたした。

細江さんの助手として作品制作の現場に立ち会うことができたことはほんとうに幸運なことだったと思っている。しかし、それだけで自分自身の作品が出来るわけではない。ただ、細江さん

と同じことは出来ないし、感覚的な違いは感じていた。私は自分自身を峻別し、好きな写真家、好きな写真を見つけ研究することがいちばんいいと思っていた。もちろんアダムスやウイン・バロック、ウエストンに強く引かれ、研究もしてきた。しかし、彼らはあまりにも大きすぎ、いきなり近づくには無理だと思っていた。そこで、彼らに影響され、現在も写真制作を続けている若手の写真家に興味を集中することから始めたのが正直なところ。それは、ポール・カポニグロ、ジョン・セクストン、アラン・ロス、や、フレッド・ピッカー、ロサモンド・パーセル、リンダ・コナー、ジョージ・タイス、ジェリー・ウエルスマン、モーリー・ベヤー、オリバー・ガグリアニ達だった。彼らは様々な意味でアダムスと関わりあっていて、強く影響されながらも独自の意味を表出してきている。彼らの写真集や写真展、現在何をやっているのか自分なりに研究してきたことが自分の写真につながったと思っている。そして、現在私は多少自分の作風を人に影響を与える立場に立っているのかも知れない。写真にまつわる様々な問題を研究しクリヤーすることで、自然に対しても、物に対しても人間の視覚を越えた写真による普遍的な美を表出できると思い続けてきた。

私は、暗箱の大型カメラを愛用しているが、軽くて美しいというだけではなく、不完全なカメラであるがゆえに自身の力量と感性で正していくそのプロセスが何とも心地いいのだ。カメラの水平垂直も少し油断しているとイメージから離れた画像になってしまい、目と手と体で修整していく。これは自分を律することにつながると思っている。大型カメラゆえに対象と関わる深さや時間と自分の中に流れる時間が合うように思っている。我々は物に対して正確に見ているように思えるが、カメラほど正確には見えないことが多い。

物の意味を正確に捉えるには時間が必要だ。そして、長く眺めた分だけ暗箱は正しく反応してくれる。

普段誰もいないギャラリーは、見る人にとって自由な解釈を可能にする。ノートには写真のイメージ・スケッチも交えて、一人一人の自由な解釈・感想を読み取ることが出来た。“世界がこのように見えることに驚きです”“銀塩写真のすばらしい世界です”“もっと大きいプリントがいい”“自然の美しさそのもの、それだけに残念”“白黒写真の強さとやさしさを感じます”“アーティストにしか見えない世界です ”“すばらしい、完璧です”“ゾーンシステムのなせる業”“こういう写真家が日本にいることに驚きました”

私の作品が多くの人々に少しでも潤いを与えられたとしたら、これほど大きな喜びはありません。

会場にわざわざ足を運び、見ていただいた皆様に感謝いたします。

尚、53 点の内 20 点が大学に収蔵されました。

中島秀雄写真展［光への観照］全作品（1/5）

Natural Landscape 奥多摩、1987

Natural Landscape 伊豆、1980

Natural Landscape 伊豆、1979

Natural Landscape 荒崎、1987

Natural Landscape 伊豆、1979

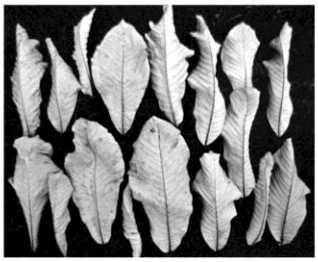
Natural Landscape 日光、1979

Natural Landscape 伊豆、1979

Natural Landscape 荒崎、1979

藤田昭子の原風景、1978
(ﾍﾞﾗﾌｫﾝﾃの塔)

藤田昭子の原風景、1978
(迷路空間)


ｼﾘｰｽﾞ･自然の光、1996

River、丹沢、1989

Copyright: Hideo Nakajim

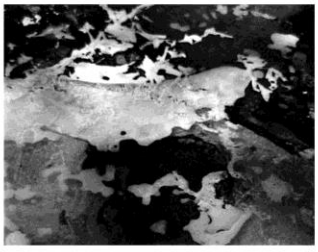
中島秀雄写真展［光への観照］全作品 (2/5)

River、山梨、1991

River、山梨、1991

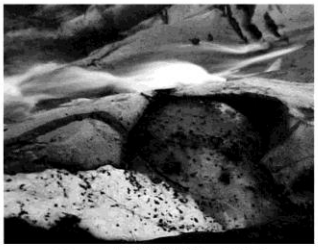
River、山梨、1991

River、山梨、1991



River、山梨、1988

River、丹沢、1990



River、西沢渓谷、1993

River、西沢渓谷、1988

Strange of Light、ﾖｾﾐﾃ、1991

Strange of Light、八ヶ岳、1996

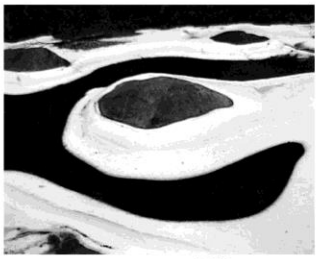
Strange of Light、ﾋﾟﾗﾀｽ、1998

Strange of Light、八ヶ岳、1996

Copyright: Hideo Nakajim

中島秀雄写真展［光への観照］全作品 (3/5)

Strange of Light、本谷川、1996

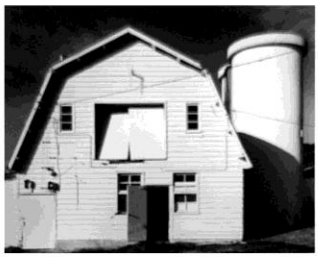

Strange of Light、山梨、1996

Strange of Light、八ヶ岳、1996

Strange of Light、原村、1991

Strange of Light、草津、1997

Strange of Light、白馬、1992


Strange of Light、八ヶ岳、1995

Strange of Light、北海道、1996

Strange of Light、美瑛、1996

Strange of Light、津軽、1998

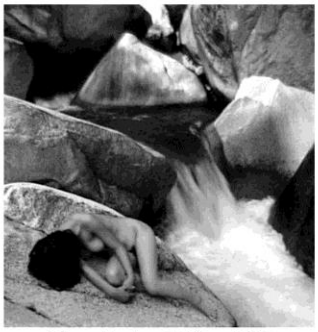
Strange of Light、四国、1998

Strange of Light、岐阜、1994

Copyright: Hideo Nakajim

中島秀雄写真展［光への観照］全作品 (4/5)

River Nude、山梨、1997



River Nude、山梨、1997

River Nude、山梨、1997

Strange of Light、明治村、1999

Snoora Pass、S. N.、1997

Court House、2001

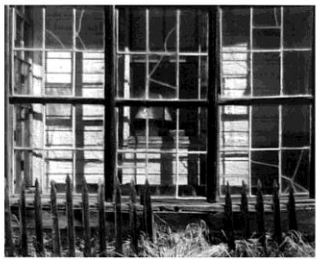
Ghost Town、Ⅰ、Bodie、2000

Ghost Town、Ⅱ、Bodie、2000

Ghost Town、Ⅲ、Bodie、2000

Ghost Town、Ⅳ、Bodie、2001

Ghost Town、Ⅴ、Bodie、2001



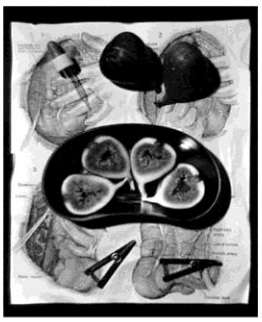
Ghost Town、Ⅵ、Bodie、2001

Copyright: Hideo Nakajim

中島秀雄写真展［光への観照］全作品 (5/5)

Botanica、Ⅰ、1998

Botanica、Ⅱ、1999



Botanica、Ⅲ、1999

Botanica、Ⅳ、1999

Botanica、Ⅴ、1999

Copyright: Hideo Nakajim

細江英公先生講演会レポート
「プリントコレクションの愉しみ」

荒井　崇

2002年2月24日、ゾーンシステム研究会総会後のイベントとして、細江英公先生の講演会が開催された。今回は、日本写真学園の教室を提供していただき、会員以外の参加もあり、大盛況の講演会となった

細江先生は、言わずと知れた、現代日本写真界における重要な写真家で、現在東京工芸大学芸術学部写真学科の教授である。細江先生の作品がかもしだす強烈なイメージは、現在でも衰えることはない。海外においても高い評価を受けている。

また、中島先生は、７年間細江先生の助手をしていたこともあり、細江先生の講演は私たちゾーンシステム研究会の念願でもあった。

今回の講演は、「プリントコレクションの愉しみ」ということで、細江先生が長年培ってきたオリジナルプリントの価値を広める活動を中心に話をしていただいた。

そもそも、美術というものが世の中に定着するためには、以下４つの条件が必要だとされているそうだ。

（1）美術館　（2）美術史教育　（3）美術市場　（4）美術家

写真もこれにあてはまるという。

近年ようやく日本も、美術館においてオリジナルプリントの価値が認められ、川崎市民ミュージアムを皮切りに、横浜美術館、東京写真美術館と次々にプリントをコレクションする動きが始まった。当初川崎市民ミュージアムは、写真史における作家自身の世界がある写真家を選んで、オリジナルプリントの収集を始めたそうだ。その際、既にプリントの価値が定着している作家も、プリントを売ることなど考えてもいない作家も、全て分け隔てなく一律５万円で作品を購入したそうである。最初はこんな不合理な収集方法でスタートした。その後川崎市民ミュージアムは、ほとんどメディアアート系の写真に力を注ぐようになってしまい、ファインアート系の写真は少なくなってしまっている。

また市場に関して言えば、一般にまず写真を鑑賞するという意識が小さい。また供給する写真家のほうも市場に対する意識が希薄である。よって、写真を扱う画廊／ギャラリーは多いが、市場が少ないというのが現実だそうである。

もともと、オリジナルプリントとは印刷用原画の意味であり、その概念が定着しはじめたのはアメリカが最初。日本に入ってきたのは1970年頃

だという。

当時は、「最も多くの人に写真を伝達可能な印刷こそが、写真を活用する最良の方法である。プリントはどうせ変色してしまうものである。薄焼きせんべいみたいなもの。ネガを取っておけば何枚でも焼けばよい。」と考えられており、印刷後は多くのプリントが焼却されていた。プリントが残っているのは、何とアマチュアの写真が多いとのことである。

「印刷用の写真が重要視されるということは、多かれ少なかれメディアの編集者が言うように写真を撮らねば成り立たないのか？写真家が自分自身の写真を持って、人に売る世界ができたならば、写真家の自由と独立のために最もやるべきことではないか。」細江先生はこの思いを実現すべく、ニューヨークの画廊で細江先生の作品を扱ってもらい、そこで売れたお金をプールし、ニューヨークの画廊で他の作家の写真を購入。日本に持ち帰って、日本の写真家に見せることにより、同志を募ったそうである。ここで購入した写真は、画廊で正式にカタログプライスの付いている作品をあえて選んだという。オリジナルプリントの価値を日本の写真家に知ってもらうためである。ちなみにこの頃、細江先生のオリジナルプリント収集を担当していたのが、当時助手をしていた中島秀雄先生だった。

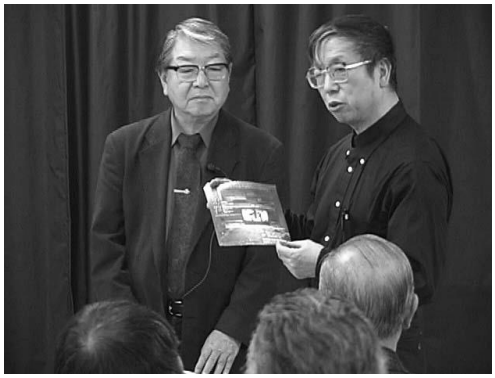
今回の講演会で、細江先生は、先生所蔵のオリジナルプリントを見せながら興味深いエピソードを紹介してくださった。その中で、特筆すべきものを以下に紹介する。

1．絵画コレクター佐藤ただお氏

そもそも美術のコレクションとは、金持ちだけがやる事ではない。作品は作家の全霊を込めて作られたものである。作品収集とは、作家の魂を作家とともに共有するものであり、作品に対する想いを高め、更には精神生活を高めるものであるという。以下のエピソードは、それを最も感じ取れる話であった。

佐藤氏は絵のコレクターである。佐藤氏はキャリア警察官で、娘さんはプロテニスプレーヤー。しかし決してお金持ちのコレクターでは無い。絵のほうは、銀座南画廊の清水氏に学んだそうだ。

佐藤氏は以前、ある作家の絵を見て、「全ての生命感を感じる緊張感」を体験する。「これほどまでに緊張感のある作品は、次には作れないのでは？」と思った。そしてその作家の作品を収集、研究し始めたそうだ。そしてある日画廊で、その作家が自殺したことを知らされるのである。そのとき佐藤さんは、画廊の主人にこう言ったという。「私は勝ったと思いました。」



佐藤さんは決して冷酷非情な人では無かった。むしろ物腰の柔らかい、やさしい人だったという。「見る人はその位厳しい。作家も命がけなら見るほうも命がけなのである。」細江先生は、コレクションの意味をしみじみと語ってくれた。

２．工芸大学における土門拳コレクション

工芸大学が写真コレクションを始めた当時、会計監査の際、「細江先生は強盗だ。たかが印画紙なのに、なぜこんなに高いのか？」。と言われた。当時写真を高値で購入することは、誰も考えられなかったのである。細江先生は切り返えした。「違いますよ。私は説教強盗だ。」と。

こんな時代のある日、土門拳先生のコレクションをお願いすることになった。当時土門先生もご多分にもれず、「印刷こそが写真の使命」と考えており、コレクションに関しては、やや躊躇していたという。そこで、細江先生はこう説得したそうである。「土門先生は、写真によるドキュメントを、印刷によりすばらしいものにしている。しかし先生のドキュメントが、50 年後、100 年後、正確に伝わらなければ、先生の気持が本当に伝わらないではないですか。正確に伝えるためには、原画であるプリントにサインをする。それしかないじゃないですか。」

土門先生は低い声でこう言った。「うーん。お前うまいこと言うな。」

こうして、古寺巡礼を含めて 1300 点を寄贈。プリントは、写真弘社の腕利きプリンター（柳沢氏）に限定して作業が進められた。これは、当時 K プリントと呼ばれた高水準のプリントであったという。

その後、600 点を完成したところで、土門先生は倒れ意識不明となった。残りは娘さん（工芸大卒）がプリントを判定し、完成にこぎつけた。

残念ながら、当時最先端と言われたチバクロームプリントであったが、最近になって変色が発生。細江先生は言う。「これも時代だ。」と。

３．細江先生所蔵オリジナルプリント紹介

今回の講演の中で、細江先生は御自身の所蔵されているオリジナルプリントを私たちに披露してくれた。

（１）ブラッサイ

ブラッサイはハンガリー人であるが、パリに移住し、1932 年から 1933 年にかけてパリの夜景を撮影している。この夜景は非常に評価が高いもので、まずこの夜景のポートフォリオ（50 部限定）を見せてくれた。

なお細江先生は、1973 年に、ニューヨークのウィトキンギャラリーでブラッサイ本人に会っているそうだ。

（2）ポール・ストランド

２０世紀初頭にアメリカで活躍したポール・ストランドは、ストレートな作風が特徴で、特にドキュメントに深さが感じられる作家。細江先生曰く、音楽で言えばベートーベンだそうである。

今回見せていただいたポートフォリオは、全てフォトグラビアによるものである。フォトグラビアとは、凹版印刷、すなわちへこんだところにインクを含ませて行う印刷で、銅版エッチングに似たものである。当時は１枚１枚手で行っていたが、その後輪転機になった。写真のトーンがきれいに

出たので、今でもそのなごりで写真のページをグラビアと呼んでいるという。今ではアミ版を用いた平板印刷、すなわちオフセット印刷に取って替ってしまった。フォトグラビアは、３Ｋの仕事で儲けも得られないため、今日、日本ではだれもやっていないそうだ。

（3）細江英公

今回は、細江先生の作品もオリジナルで披露していただいた。作品は、鎌鼬、男と女、薔薇刑等、代表作ばかり、手にとってゆっくり見られる貴重な機会をいただいた。

ちなみに以前、松涛美術館で行われた「細江英公の写真」で出品されたビンテージプリント（鎌鼬）は、定着不足のために銀が析出してしまったそうである。当時このプリントは、ドイツ、アグファ社のポルトリガーというロール印画紙を使用し、写真弘社で巻きながら現像したという。この印画紙は銀の含有量が多いため（国産印画紙の３倍前後）、国産の印画紙に比べて定着時間を長めに設定する必要があった。しかしながら、当時はそれを知らずに国産印画紙と同一時間で処理してしまったのである。

その時代の国内

印画紙メーカーは、いかに少ない銀で黒の濃度を出すかにしのぎを削っていたため、銀の含有量で定着時間の差が生じてしまっていたのである。ただし、銀の含有量が減っても、数値上黒の濃度に差は無いと言われていたが、数値では現れない深みに関しては、銀の多いほうが勝っていたという。

細江先生は、この銀の析出も一つの不思議な効果としてとらえ、このまま出品したそうである。

以上３シリーズを解説付きで見せていただいて、私たちはそのオリジナルプリントを見るという喜びを、改めて感じた次第である。

４．細江先生の近況

まもなく細江先生の作品が、アメリカでフォトグラビアのポートフォリオ（5 枚セット）として発売になるそうだ。題名は、「Ａｗａｋｅ（覚醒）」250 部限定で価格は$2500 とのこと。

またこの夏、細江先生のワークショップ（ルナロッサグラフ）を、U.S.Aコロラドのアンダーソンランチアートセンターにて行うそうである。

更に４月１日より、東京工芸大の細江ゼミ卒業展が開催される。場所は、有楽町のスパンアートギャラリー、「細江英公と若い仲間たち（はじめて写真を買う写真コレクターのための写真展）」と題して、何と細江先生の写真も含めて、１点 5000 円という破格値にて販売するという。写真コレクションの底辺を広げるすばらしい試みである。

ちなみにその後、筆者は、この展覧会で数点の作品を購入した。購入した若い作家から丁寧な手紙が寄せられたこともあり、とても印象深い経験となった。また、この展覧会によって何と、プリントが 128 点売れたそうである。

以上、私たちの念願でもあった細江先生講演会は大成功に終わった。ゾーンシステム研究会としては、今後もこのような活動を重ねていくことが重要であると感じた次第である。

日光撮影会

荒井　崇

２００２年1月２６日（土)、２７日（日)、２日間にわたり日光にて冬の撮影会が行われた。

２６日朝９：００、東北自動車道の大谷 PA へ集合、分乗した車が全て定刻前に無事集まり日光へ出発、ＡＭ１０：００、奥日光の光徳沼へ到着した。

光徳沼は例年よりやや雪が少なめ、沼上の草に積もる、綿帽子のような雪は見られなかったものの、細かな氷の結晶が至る所に現れていて、被写体としては格好の題材。昼頃まで沼の撮影を行った。

戦場ヶ原の赤松茶屋で食事、午後からは竜頭の滝近辺を散策。竜頭の滝は、中島先生も以前撮影されているスポットで、この時期は滝周辺のみごとな氷が有名だ。しかしながら、近年滝壷へ降りる道が閉鎖となり、近づいての撮影は不可能。竜頭の滝の上流を歩きながら川沿いの雪や氷を撮影した。特に道路と交差する橋周辺には氷や雪の撮影ポイントが多く、夕方までじっくり撮影を行った。

１７：３０撮影を終え、宿泊先である戦場ヶ原の「ペンションアイリス」へ到着。

ペンションアイリスは、戦場ヶ原駐車場の奥にあり、ペンションとはいっても民宿のたたずまい。

古い和風の建物である。

夜のミーティングは、カメラやポラロイド機材の使用方法についてディスカッション。石井さんは、ポラロイドを間違った使い方をしていたことがわかり大変役に立つミーティングとなった。

翌２７日、朝から大雪。昨日夜から積もった雪がいきなり数十センチとなり、宿の前の道は通行不能となってしまった。宿の主人によると、除雪車が来るのは何時になるかわからないとのこと。自分たちの４輪駆動車で雪を踏み固め、その後を乗用車が付いて行くしかないという。車高の高い宮岡さんと菊地さんの４輪駆動車に雪を踏み固めてもらうこと２往復。途中スタックしていた車を牽引で救出したりしながら、戦場ヶ原駐車場に着いたのは何と１１：００過ぎ。２時間前後、雪と格闘したことになる。

戦場ヶ原駐車場にて、雪が小康状態になった時間を見計らって撮影。吹雪の中、悪戦苦闘しながら美しい雪の風景を狙う。何と石原さん、内田さん、菊池さんの３名は、数時間同じ場所にて粘っていた。その集中力にはみなさん脱帽。

撮影終了後、中島先生、菊池さん、宮岡さんの３名は、湯の湖にもう１泊することにした。残りは電車と車に分かれて帰宅。また、折からの大雪でいろは坂は大渋滞。

それにしても、戦場ヶ原の雪景色は何と美しかったことか。雪と風で思うように撮影できなかった歯がゆさ。そして自然の厳しさを感じた１日であった。

参加メンバー：中島先生／菅野氏／内田氏／石原氏／石井氏／古川氏／菊池氏／宮岡氏／松本氏／畑氏／荒井

Information

【トピックス】

１．中島先生写真展／ゾーンシステムワークショップ（東京写真文化館）

東京写真文化館にて、中島先生の写真展とワークショップが開催されることになりました。

写真展は 5 階のギャラリ-で、2002/10/14～20（30 展前後）。ワ-クショップは 11 月から 5 月まで月一回の長期ワ-クショップになります。現在日程等調整中ですが、最終的に参加者全員のポ-トフォリオをつくります。

参加希望の方は、中島先生までご連絡ください。また、知り合いで参加希望の方がいましたら紹介してみてください。

なお、この写真展は、ワ-クショップのための講師紹介展になっていまして、今までの作品と新しい作品を展示する予定です。

２．ゾーンシステムワークショップ（川崎市市民ミュージアム）

恒例の、川崎市市民ミュージアム主催ゾーンシステムワークショップは、2002 年 10 月 5 日から毎週土曜日６回にわたって開催されます。

参加希望の方は、中島先生までご連絡ください。また、知り合いで参加希望の方がいましたら紹介してみてください。

３．ゾーンシステム研究会暗室ＷＯＲＫ

暗室ＷＯＲＫの日程が決まりました。ぜひご参加ください。

7 月 28 日（日） 工芸大学 暗室

９：３０－１７：００

費用など詳細は別途ご連絡します。

参加希望の方は、事務局までご連絡ください。

４．ハービー・山口写真展[ＰＥＡＣＥ]

銀座のライカギャラリーにて、ハービー・山口さんの写真展が開催されています。日本人としては２人目のライカギャラリーでの写真展だそうです。必見。

2002 年 7 月 3 日―8 月 4 日(10:30-17:30)

銀座松島眼鏡店３Ｆ

【売ります】

［松本ひさ子］

・引き伸ばし機 LUCKY 90M

（６X９まで可能、レンズ無し） 40000 円

＊ネガキャリア等詳細備品は本人に確認してください。

＊松本さん宅まで取りに来られる人が条件です。

［内田順］

・ライツ引き伸ばしレンズフォコター50mmF4.5

40000 円（程度中）

・ウォーレンサック引き伸ばしレンズ

300mmF5.6 座金付き

9000 円（程度下）

・現像バット用恒温器（２台有）

3500 円(程度中)

・コダック 4x5 現像ハンガー及びハードラバータンクセット（12 枚・3 個蓋付き）

25000 円(程度中)

・ポラホルダー545

10000 円(程度中)

・フジノン 210mmF5.6

ｾｲｺｰｼｬｯﾀｰ､ﾘﾝﾎﾌﾎﾞｰﾄﾞ付き

18000 円(程度中の下)

Information

・ライツ引き伸ばし機バロイ２・本体、ネガキャリア

120000 円（程度中の上）

【次回予告】

次回は、今年５－６月に行われました米国撮影ツアーの報告記事を載せたいと思っています。

【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。

［以下原稿投稿に関するお願い項目です。すみませんがよろしくお願いします。］

１．写真原稿は、紛失事故防止のため、できるだけネガやポジは避け、プリントでお願いします。

２．今まで同様、手書き文章はスキャナーでパソコンへ入力できないので、原則として受け付けません。以下いずれかの方法にて投稿願います。

・ワープロやパソコンでプリントアウトしたもの、（スキャナーでパソコンへ入力します。）
・パソコンの電子メール
・ウィンドウズの Word2000
・text ファイル

（ちなみにこの会報は、ウィンドウズの Word2000 で作成しています。）

ただし、どうしても手書き文章しか投稿できない事情がある場合は、事前に連絡をいただくようお願いします。

３．イラストは手書きでも結構です。スキャナーで取り込みます。

パソコンの扱いが不慣れのため、時々ご迷惑をおかけするときがあるかと思いますので、その際はよろしく御指導ください。

［編集者］　荒井　崇